

新庁舎の機能に関するご意見（建設コストや費用対効果を踏まえ、実施設計における検討事項を再検証した）

No.	内 容	<p style="text-align: center;">能島 暢呂 氏 (防災機能)</p> <p>岐阜大学 工学部 社会基盤工学科 教授 清流の国ぎふ 防災・減災センター 副センター長</p>	<p style="text-align: center;">佐藤 八千子 氏 (ユニバーサルデザイン)</p> <p>岐阜経済大学 地域経済研究所 特別研究員 (元岐阜経済大学 経済学部 教授)</p>	<p style="text-align: center;">磯部 友彦 氏 (立体駐車場)</p> <p>中部大学 工学部 都市建設工学科 教授</p>	<p style="text-align: center;">田中 英紀 氏 (建築性能)</p> <p>名古屋大学 施設・環境推進室 特任教授</p>
1	整備内容について	<p>(1)防災機能に関する整備内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 立体駐車場の耐震性能を、通常建物の1.25倍に強化することは、防災上大変有益であり、望ましい設計である。 当初計画より、非常用発電量を増加し、防災フロアなどに、非常用電源を充実することや、太陽光発電した電気を直接防災フロアである6階で使用可能とする設計は、防災上有益である。 自衛隊等の災害車両の駐留のため、みんなの広場カオカオを重車両対応舗装とすることも、防災上有益な設計である。 <p>(2)立体駐車場の災害時の活用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 災害時には、何よりも、安全性が確保された建物が存在することが重要であり、これが担保されて初めて支援物資の仕分けや自衛隊等の災害車両の駐留など、様々な活用が可能となる。 立体駐車場の災害時の運用として、低層階を駐車スペースに、高層階を支援物資の仕分けスペースにするなど、事前に利用目的を決定しておくことが望ましい。 立体駐車場の用途から車中避難スペースを発想するが、車中避難については、岐阜市全体の車中避難対策の方針を先に決定すべきである。 <p>(3)防災設備の充実と建設コストとの関係</p> <ul style="list-style-type: none"> LPガスバルクタンク、マンホールトイレ、災害時シャワーといった防災設備は、いずれも防災上有益な設備であり、是非、採用することが望まれる。 	<p>(1)ユニバーサルデザインの整備内容</p> <p>①全体</p> <ul style="list-style-type: none"> 現在、計画するユニバーサルデザインを踏まえた設備や仕様は、コスト面からも適切であると考ええる。 <p>②サイン</p> <ul style="list-style-type: none"> 案内サインにピクトグラム（図記号）を活用することは、大変分かりやすい。 <p>③移動・誘導用設備</p> <ul style="list-style-type: none"> 通路の幅員は、最も狭い箇所でも約5mを確保しており、適切である。 ハンディキャップのレベルに配慮して、エスカレーターとエレベーターを複数基設置する計画は、一定のコストを要するが適切な判断である。 庁舎の出入口や市民が利用する居室の扉は、使いやすい自動ドアや引き戸を採用する一方、執務室の扉は廉価な開き戸を採用しており、コストを抑制する配慮がされている。 階段のステップ部については、滑らないよう配慮すると良い。 庁舎内の手摺は、すべてを2段式にする必要はなく、場所に応じて設置すれば良いが、手摺りの高さについては、様々な人々が使いやすい規格とするよう、検討してほしい。 高層棟（執務室）の誘導ブロックの設置は、視覚障がい者の方々が利用する頻度や、職員の案内が可能であることなどを考慮して検討すべきである。 視覚障がい者の方々に対する音声案内は、出入口やエレベーターホール、トイレなど必要な位置に設置されており問題ない。 	<p>(1)立体駐車場のPC構造の採用</p> <ul style="list-style-type: none"> 岐阜県は、他県と比べてコンクリートの原材料が豊富であり、コンクリート産業が盛んである。 耐震性能を1.25倍に強化する計画は、災害時の駐車場の有効活用に繋がるため、適切と考える。 <p>(2)新庁舎立体駐車場のレイアウト</p> <ul style="list-style-type: none"> 立体駐車場内のバス停留所は、乗降場所以外にも手すりを設けるなど、利用者の安全性に配慮している。 今後、運用面において、駐車場東側道路などに車両が連なり、交通渋滞を発生させないよう十分な注意が必要である。 駐車場内に設ける計量検査室は、利用者が機器の搬入の際に、荷卸しがしやすく、利便性の良い設置場所である。 <p>(3)立体駐車場のサイン計画等</p> <ul style="list-style-type: none"> 立体駐車場の入口に案内人を配置し、ハートフル車両と一般車両の誘導を行うことは良いと考える。 ハートフル駐車場の空情報は、2階に上った際の吊り下げ誘導表示や、2階が満車の場合には、スムーズに3階のハートフル駐車場に向かうことができる動線計画となっており、望ましいと考える。 立体駐車場内には、歩車道分離帯や、横断歩道などを設置しており、適切な安全確保を行っている。 立体駐車場内のエレベーターから遠い場所に駐車した人が、エレベーターの位置を認識で 	<p>(1)省エネ設備の充実と建設コスト</p> <ul style="list-style-type: none"> 新庁舎に導入する省エネ設備は、将来のランニングコスト（維持管理費）を考慮して計画しており、決して過剰ではないと考える。 <p>(2)新庁舎の建物性能</p> <ul style="list-style-type: none"> 新庁舎の最上階や議場の屋根部分における断熱性能の向上（断熱材の厚み35mm⇒50mm）を図ることは、結露対策や省エネ対策として効果が期待できる。 議場天井内の空調設備を利用した換気方式は、結露対策や省エネ対策として、効果的である。しかし、前回助言したように冬期の加湿空気を天井内に直接排気する方式は結露のリスクが高まるため、運用でも十分注意してほしい。 複数の熱源（ガス、地中熱）で空調に利用する冷温水を作り、さらにその冷温水を庁内で共有し、全庁的に利用する計画は需要電力のピークカットやBCP対策など、多様な効果が期待できる。また、季節に応じて熱源を選択的に運用すると、全体システムの効率向上が期待できるため、この運転制御の考え方を十分考慮する必要がある。 新庁舎で採用する様々な省エネ設備の省エネ状況などを示すBEMS（ビルエネルギー管理システム）は、来庁者の方々にわかりやすく飽きのこない見せ方を工夫する必要がある。特に標記内容が専門的になりすぎたり、必要以上に数字を羅列しないよう配慮する。 トリプルLow-E複層ガラス（断熱性能の高いガラス）の採用は空調効率の向上などに非常に効果的ではあるが、外部から見た際にガラスの色合いが変わる恐れがあるため、意匠上問題がな

		<p>(4)新庁舎開設後の運用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新庁舎の整備に加え、災害時に、円滑な災害対策活動が図られるよう、様々な運用を考慮しておくことが重要である。 さらには、新庁舎のみならず、つかさまち、中心市街地、岐阜市全体といった大きな単位で、防災対策の運用強化も行ってもらいたい。 	<p>④来庁者用居室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授乳室は、一つの部屋を仕切るのではなく、個室にしたことは、コストは要するが気兼ねなく誰もが利用しやすくなり、良い判断である。 ・個室相談室も、オープンカウンターと比べて一定のコストを要するが、近年のプライバシー意識の高まりを踏まえると必要な設備である。場所に応じてガラス壁を取り止めるなど、コスト面にも配慮が見られる。 	<p>きるようサインを設けたり、エレベーター付近の照明を明るくするといった工夫があると更に良い。</p>	<p>いか検討が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・免震ピットから空調の給気を取り入れるクール・ヒートトレンチの採用は、省エネ効果が期待できることに加え、ピット内換気も併用できることから、更なる省エネ効果が期待でき、適切である。ただし、給気と排気のショートサーキット(空気が循環して給排気効率が悪くなる現象)に留意すること。 ・照明制御は、昼光センサーと画像センサーを組み合わせ、きめ細かく制御することで、省エネ効果が期待できる。さらに、段階式な調光にすることで、周囲の人々に不快感を与えない照明が実現できるため、検討することが望ましい。 ・ライトシェルフ、ブラインド、自然換気通風口などの窓周りの設えは、それぞれの本来の機能が十分に発揮されるよう、設置位置や仕様に十分配慮する。季節や時間帯、建物方位に応じて、何をどのように使うか十分に検討し、その方法を明確に示す必要がある。 <p>(3)新庁舎開設後の運用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・採用する省エネ設備を効果的に機能させるためには施設管理者がそれぞれの設備の機能を十分把握した上で適正に管理するとともに、性能管理指標を明確に定めて運転性能を継続的に評価・監視しながら運用することが重要である。
--	--	--	--	--	--